

9

重点領域研究「マイクロ統計データ」・公募研究（課題番号 08209118）

「家族構造の国際比較のための基礎的研究－公共利用マイクロデータの作成と活用－」
研究報告書（3） 平成9年度

家族構造の国際比較研究をめざして

－米国NSFHデータの利用を通して（第2次報告）－

1998年3月

研究代表者 石原邦雄

（東京都立大学）

まえがき

国際比較が可能となるような家族に関する総合的なデータを整え、かつそれを研究者のコミュニティに共同利用できる形で供給していくこと、これを大きな目標として、そのための基礎的・準備的な研究を行うことが、本研究の目的である。第1に、利用可能な米国での類似調査の個票レベルのデータを活用して、日本との比較の視点において独自の集計分析を試みること、他方第2に、予備的な調査を実施して、日本における全国規模の家族と世帯に関する総合的学術調査を実施する際の問題点を整理し、調査デザイン、調査項目等について検討を深めるとともに、合わせて、データセットのメンテナンスと、共同利用のためのシステムづくりについて検討を進めることが、本研究の課題である。

前述の研究課題に沿って、本研究は、大きく二つの作業課題に分け、それぞれに応じた作業班を構成して取り組まれている。第1がNSFH分析班と略称しているもので、ここでは、国際比較の基礎データとなりうる既存の調査データの個票レベルでの活用として、家族研究データの中で最も先進的な試みとして知られている、米国ウィスコンシン大学の研究者らによる National Survey of Families and Households (NSFH) にアクセスし、データの公開、共同利用、その分析の実際を体験することによって、より高度な家族の国際比較の可能性を検討するとともに、我々自らが共同利用データを作成し、公開する際の問題点を学習し、経験と知見を蓄積することを課題としたのである。

他方第2に、予備的調査実施・共同分析班では、日本における全国規模の家族と世帯に関する総合的学術調査を実施する展望の下に、そこでの問題点を整理し、調査デザイン、調査項目等について検討を深めるなかで、予備的な調査を実施すること、そしてさらに、データセットのメンテナンスと、共同利用の試行を通して、そのためのシステムづくりについても検討を進めることが課題となった。

本報告書は、このうち、NSFH分析班の第2年度の成果をとりまとめたものである。

なお、この作業メンバーとしては加わっていないが、昨年来の分析作業やそのとりまとめについて、カリフォルニア大学の石井クンツ昌子教授には、良き助言者としてご支援いただいている。謝意を込めて記しておきたい。

1998年3月

研究代表者

石原邦雄（東京都立大学）

研究組織

研究代表者	石原邦雄 (都立大学)	
分担研究者	渡辺秀樹 (慶応大学)	岩井紀子 (大阪商業大学)
	稲葉昭英 (都立大学)	杉岡直人 (北星学園大学)
	田淵六郎 (都立大学)	山本 努 (山口大学)
	加来和典 (宮崎大学)	
研究協力者	永井暁子 (家計経済研究所)	安達正嗣 (名古屋市立大)
	賀茂義則 (ルイジアナ州立大)	岩井八郎 (京都大)
	藤本哲史 (南山大)	高田洋子 (福井大)
	品田知美 (東京工業大)	松田苑子 (淑徳大)
	加藤彰彦 (早稲田大)	土倉玲子 (北大)
	畠中宗一 (大阪市立大)	杉井潤子(神戸山手女子短大)
	正岡寛司 (早稲田大)	西村純子 (慶応大)
	藤見純子 (大正大)	島崎尚子 (放送大)
	西野理子 (早稲田大)	末盛 慶 (都立大)
	新田目夏美 (国際基督教大)	平尾桂子 (ノートルダム大)

研究経費

平成9年度

3500千円

目 次

I 序論

1. NSFHデータ分析の展開と国際比較研究への展望 石原邦雄 1

II 夫婦関係の動態と家事役割

2. 夫婦形成タイミングに対する定位家族構造の効果とそのコーホート間変動
加藤彰彦 5
3. Determinants of Marital Dissolution: A Role of Marital Quality
賀茂義則・新田目夏美 24
4. 横断データと縦断データ—結婚継続年数と結婚満足度— 土倉玲子 49
5. 夫の家事参加と妻の夫婦満足感
—末子年齢、労働時間、性別役割意識による交互作用— 末盛 慶 62
6. 若年夫婦の家事時間の変化とその要因—日米比較— 永井暁子 75
7. 家事時間に関わる要因分析
—日本および米国有配偶女性の比較— 品田知美・松田苑子 85

III 親子関係と高齢期の社会関係

8. アメリカの働く親の子どもとの接し方—男女比較分析— 藤本哲史 94
9. 親子関係でみる「健康な家族」(Healthy Family)
—親の「健幸」(well-being)と、親の認知する子どもの「健幸」(well-being)—
畠中宗一・杉井潤子 105
10. 子どもへの親の評価と学校での子どもの成績 高田洋子 118
11. 米国の高齢者におけるきょうだいとの交流頻度の5年後の変化の分析
安達正嗣 134
12. 加齢と社会的地位：日米比較 岩井八郎 143